

To Kill a Mockingbird as a Bildungsroman*

加藤 将

1. Introduction

To Kill a Mockingbird は Harper Lee の唯一の小説であり、1960 年に発表され、翌年ピューリッツァー賞を受賞した。この小説は 11 カ国語に翻訳され、邦訳では「アラバマ物語」として知られている。この小説は人種差別を一つの大きなテーマとして取りあげているにもかかわらず、1950 年代、60 年代に行われていた公民権運動の最中に発表された。世界的に有名なキング牧師の演説(1963 年)以前のことであり、非常にメッセージ性の強い作品だったことが分かる。小説は人種差別や社会的マイノリティに対する差別、父 Atticus の子どもたちに対する愛情、子どもたちの成長などを中心に物語が展開されており、アメリカの中学校、高校でも英語の授業で広く使われるほど認められている。しかし、タイトルがなぜ *Mockingbird* (マネシツグミ)なのかという謎もある。小説の中で、実際に “mockingbird” が出てくるのは 4 回だけである。

そこで、私はこの小説が書かれた時代のアメリカを知ることを通して物語を見ていきたい。また、この小説は子どもたちの成長物語とも言われているが、それは Jem と Scout のどちらの成長物語かを考察していきたい。また、タイトルに “Mockingbird” を用いている意味について考察することによって、*To Kill a Mockingbird* という小説を解釈したいと考える。

2. Racial Discrimination in the Backgrounds

物語の舞台は 1930 年代のアラバマ州 Maycomb という小さな町である。黒人の青年 Tom Robinson が、白人の女性 Mayella Ewell に性的暴行を加えたとして裁判にかけられる。Jem と Scout を子どもに持つ父であり、弁護士でもある Atticus は Tom の弁護をまかされる。町の人々は、黒人を弁護しているという理由で Atticus を誹謗中傷し、それは Jem と Scout にまで届くばかりか Atticus を脅迫するにまで至った。裁判では Atticus の弁護により、Mayella と彼女の父の証言が虚偽であったことが暴かれるのと同時に、Mayella に暴行していたのは彼女の父であるという新たな主張が出される。しかし、白人ばかりの陪審員により Tom は有罪判決を受ける。Atticus は控訴するつもりでいたが、Tom は刑務所からの脱走を図り、17 発もの銃弾で射殺される。Mayella の父 Bob Ewell は、裁判で自分の嘘と自分が自分の娘に暴行をしてい

たことを暴いた Atticus とその子どもたち Jem と Scout に恨みを持ち、子どもたちを狙う。ある夜、Bob は子どもたちが夜道を歩いているところを襲う。そこで子どもたちを救ったのが Boo Radley である。Boo は物語の最初からこの場面まで姿を見ることがない引きこもりの青年である。物語前半では近所の人から怪人扱いされているため、子どもたちの恐怖心と好奇心を駆り立てる対象となっている。そんな Boo が子どもたちを救ったとき、Bob は自分のナイフが刺さり、死んでしまう。Boo が刺したのか、あるいは Atticus が考えるように Jem が刺したのかもしれないが、保安官はそのことについて考えないようにと伝え、Bob の死は事故であるとした。

作者が作品の舞台を作品が発表された 1960 年頃に設定せず、30 年代に設定したことには、2 つの理由が指摘される。1 つは、時代を昔に設定することで南部での批判をかわそうとしたことが挙げられる。南部の人々は合衆国の最高裁判例 “Brown v. Board of Education” に対し抵抗を示していた（平野）。この裁判は、黒人と白人の子どもを分離して教育を行うのは不平等であると裁定したものである（Johnson, p.98）。また、作者自身、アラバマ州（アメリカ南部）の出身であり、当時の南部で起きた黒人差別に関わる事件として様々な事件を知っていた。1 つは黒人女性 Rosa Parks がバスで白人に席を譲らなかつたとして逮捕された事件。黒人女性 Autherine Lucy がアラバマ大学に入学したことで起きたキャンパス内や町での暴力行為（Johnson, pp.86-88）。これらの 2 つが大きく取りあげられているが、それだけではないだろう。当時の南部では、ほとんどの物事が黒人と白人で分離されていた。

（Johnson, pp.83-84）。これらからも、当時の南部における黒人に対する差別はひどいものであることが分かる。作者は小説の舞台をこのような同時代ではなく、昔に設定することで南部での批判をさけようとしたと考えられる。

もう 1 つの理由に、1930 年代に実際に起きた “Scottsboro” 事件と物語の中の Tom Robinson の裁判との関連が挙げられる。まず Scottsboro 事件について簡単にみておきたい。1931 年、二人の白人女性がアラバマへと向かう鉄道の車両の中でレイプされたとして 9 人の黒人男性が起訴された。被告人たちは女性らと同じ車両にのっていなかったこと、9 人のうち 1 人は盲目でもう 1 人は病気で助けがないと歩くことも出来ないことを理由に、そのような犯罪を犯すことは出来ないと主張した。しかし、判決は、9 人のうち 8 人が死刑、1 人は未成年ということで無効審理となった。1936 年から 37 年にかけてアフリカン・アメリカンを陪審員に加え裁判が行われると、1 人が死刑判決を受けながら、1938 年にアラバマ政府によって終身刑に減刑され、3 人は 75 年から 95 年の実刑、1 人はレイプの罪は取り下げられたものの、副保安官を暴行したとして 20 年の実刑判決を受けた。他の 4 人は 37 年に仮釈放され、1940 年代にはアラバマ州の新聞社や多くの人々が残りの Scottsboro の被告人の釈放を求める動きが強くなり、一人ずつ釈放され、1950 年には最後の一人が釈放される。しかし、46 年に釈放されながらも、アラバマから逃亡し 30 年間逃亡生活を送った

人物もいる (Johnson, pp.16-17, p.74)。釈放されても、それほど黒人に対する社会からの視線は厳しいものであったのである。

この事件と小説には、いくつかの類似点が見られる。時代設定が物語と同じ 1930 年代であることや、アラバマという場所、告訴（白人女性が黒人男性にレイプされたという）内容も類似している。また Scottsboro 事件の被害者とされる白人女性らは、物語の Mayella Ewell と同じような貧しい階級だったとの記録がある。Atticus と事件の判事 James E. Horton の言葉は、Atticus の陪審員に向けた演説を思い出させるようなものだった (Johnson, p.19)。

作者は、実際に起きた事件と関連させ、非常に強いメッセージ性を持った作品を、まだ黒人差別が根強く残る 1960 年に発表したのである。中村はこの時期に作品を発表したことについて「この作品が発表されたこと自体、当時としては勇気ある訴えであったと言える」(中村, p.3) と言っている。

ここまで、物語における差別や、作品が発表された時代の背景、Scottsboro 事件との関係について考察してきたが、小説の中心となる登場人物は子供たちであり、語り手の Scout とその兄 Jem である。子どもたちが、前述した Tom Robinson の裁判だけでなく、近隣の人々、学校生活、家族との関わりを通して成長していく様子を読み取ることが出来る。Chapter 2 では成長物語としての *To Kill a Mockingbird* について考察していきたい。

3. Bildungsroman of Scout Finch

幼い Scout と Jem がコミュニティで起こる社会的な出来事を目撃し、幼いながらも成長していく様子が描かれている。中村真理はこの作品について、マイノリティの人権問題とスカウトという一人の少女の成長物語が融合した作品であると言っている。(p.3) しかし、Jennifer Murray は論文“More Than One Way to (Mis)Read a *Mockingbird*”の中で、この小説は Scout の成長物語というよりもむしろ兄 Jem の成長物語であると言っている。(p.80) Murray は精神的な成長の移り変わりにおける発達段階を箇条書きに “childhood terror” “admiration of male role models” “adhesion to adult rules” “pride in physical transformation” “personal courage” “opposition” の 6 つを挙げ、それらの見られる場面を抜き出して、この小説を Jem の成長物語と解釈する。裁判で Tom Robinson が有罪判決を受けた次の章の冒頭は “It was Jem’s turn to cry”(284)から始まるが、そこでの Atticus とのやり取りから Murray は Jem が確かに「成長している」(Murray, p82)と述べている。

Murray は発達を 6 つの視点から取りあげているが、物語は Scout の目を通してあるので、客観的に Jem の成長が見て取れるのは、当然のことである。Scout の目を通して、様々な登場人物が Jem の成長について言及をしており、身体的成長も見て

取れる。Jennifer Murray は、Tom Robinson の有罪判決に続く次の章で、Jem が涙を流す場面を確かな成長場面であるとしている。確かに、Jem は裁判の様子を理解しているようで、Tom Robinson の判決について自分の考えも持っていた。Murray も Atticus に対する“opposition”（反抗）を Jem の成長として挙げている。Tom Robinson のいる留置所の前で Atticus が何人かのギャングに囲まれるが、そこへ Jem, Scout, Dill の三人が姿を現す。Atticus は Jem に対して、他の二人を連れて家に帰るように伝えるが、Jem はそこで強く反抗する。Scout 自身、最終的に Jem が家に帰らなかったことで父親に怒られるだろうと思っていたが、それは間違っていた。“Atticus reached out and massaged Jem’s hair, his one gesture of affection.”(207)とあるように、父 Atticus は Jem の「反抗」を理解し、その勇気を讃えているのである。

確かに、父親 Atticus は、子供達が成長していると感じた場面では成長を認めているが、Jem の涙について、Atticus は子供だけが涙を流すと言っている。この場面においては Jem の成長を認めておらず、むしろ子どもであるという解釈をしている。また、この涙の場面では父親が Jem の成長を認める記述はない。Atticus は Jem の状態を述べたとき“*It was a little too strong for him.*”(284) と言っている。Jem にとって、裁判での出来事、特に Jem 自身が絶対に無罪だと思っていた Tom Robinson に有罪の判決が下されたという出来事は、彼にとって“*strong*”過ぎたのである。Jem はまだ子どもで、社会における「現実」を理解して受け入れることができず、涙を流していると解釈できるのであり、父親が子供だけが涙を流すと言ったのは、Jem は子供で、社会における現実を理解できていないと解釈したからであると考えられる。Jem の成長は Scout の目を通して部分的には描かれているが、必ずしもこの「泣く」場面において Jem が成長しているとは言い切れないと考えられる。

この小説は Scout の目を通して書かれているので Jem の成長がある程度見て取れるのは当然であると前述した。だからこそ読者は、語り手 Scout 自らは語らない Scout 自身の成長を物語から読みとる必要がある。この物語は、Jem の成長物語というよりも、Scout の成長物語である。小説の中で Scout は 6 歳から 8 歳である。小説は、Boo Radley と Tom Robinson を中心に「差別」に関連して話を展開しているが、Scout の成長は「差別」に関する社会的成長ではなく、「女性」としての成長である。まず、イニシエーションの観点から Scout の成長を見ていきたい。アメリカ文学におけるイニシエーションを論じた Hassan によると、イニシエーションは次のように定義されている。

Initiation can be understood for our purpose as the first existential ordeal, crisis, or encounter with experience in the life of youth. Its ideal aim is knowledge, recognition, and confirmation in the world, to which the actions of the initiate, however painful, must tend. It is, quite simply, the

Scoutにとって「実存的試練や危機、あるいは経験との遭遇」とは小説の中での出来事であるといえる。というのは、物語の主要な出来事として Boo Radley と Tom Robinson の件が大きく取りあげられているが、Scout が「大人の世界に直面」してこうとする場面はそれらだけでなく、Atticus, Calpurnia, Aunt Alexandra, Miss Maudie が様々な場面で大きく関わっているからである。Atticus が Uncle Jack とのやりとりの中で自分の教育観を “When a child asks you something, answer him, for goodness’ sake. But don’t make a production of it. Children are children, but they can spot an evasion quicker than adults, and evasion simply muddles ’em.”(116) と延べている。Atticus はこの教育観を軸に、Scout に聞かれたことは細かく説明する。6～8 歳の Scout には、身の回りで起こる出来事の中で分からないこと、不思議に思うことが多々あるが、その都度誰かに尋ねている。物語前半では、Atticus が黒人を弁護しているだけで、子どもたちの周りの環境も変化し、彼女にとって聞いたとこない人の中傷するような言葉 (“nigger-lover” “whore-lady”)などを耳にすることになる。Atticus は “Bad language is a stage all children go through”(116)と言っており、Scout にとって「試練」ともいえる時期であると解釈できる。Scout は大人に尋ねる (“What’s a whore-lady?”(115) “what exactly is a nigger-lover?”(144)) ことにより、それらの言葉を「知ろう」とし「認識」しようとし、人種差別という「大人の世界」に「向かい」、直面するのである。Scout 自身には、人種差別という意識がない。Scout が物心つかないころから黒人の家政婦 Calpurnia が母親のように子どもたちの世話をしたり、黒人の集まる教会にも出席したりしている。しかし、自らに人種差別という意識の無い幼くて innocent な Scout が、人種差別というものが存在する「大人の社会の現実」に直面している。これはまさしく Hassan が定義するイニシエーションの構造である。

また「女性」としての成長は、Scout の人との関わりから見て取ることが出来る。James B. Kelly は、論文の中で、“The transition from wearing overalls to wearing dress is commonly described by teachers as desirable progress or maturation.” (p.15) と述べて、3 人の教師が語った Scout の maturation をまとめている。小説の前半は特に「おてんば娘」としての姿が描かれている。父 Atticus が言う言葉 “Scout’d just as soon jump on someone as look at him if her pride’s at stake”(116)からも、Scout の「おてんば娘」ぶりが分かる。Scout が「女性」として成長し始めるのは Part 2 からである。まず Scout の周りの環境が少し変化するのである。Jem が大きくなっていて自分のことを自分でできるようになるということを Calpurnia から知らされた Scout は、キッチンに入ることを許可される (154)。そして、Scout がキッチンに姿を現すと、Calpurnia 自身も嬉しさを見せ、Scout に女性としての目覚めを認めている (154)。その直後の2つの段落では Dill に対して、Scout が恋心を見せ、彼女も Dill と結婚するかのような意

志を示して(154)、女心を露にしている。これらから、小説後半の冒頭は小説の前半で描かれていた「おてんば娘」とは対照的な Scout の描写で物語が始まり、Scout がここでは明らかに「女性」として成長しようとしているように描かれている。

Aunt Alexandra が Finch 家に来て、しばらく一緒に暮らすことになり、Scout は彼女から女性の在り方を学んでいく。また Miss Maudie からは、南部女性は特に友人や家族を守ることに於いて大胆である必要があり、そして真の南部女性はうわさ話をしたり、他人をえこひいきしたりしないと言うことを学ぶ。(Kelly, p.10) 小説後半では、Scout の衣服がオーバーオールからドレスへと移り変わっていて、先に引用した教員が言うように、女性として成熟しつつあることがわかる。また、進んで Calpurnia に声をかけ、実際に家事を手伝う姿が描かれている(306)。Maycomb の女性の集まりにも参加して、そこでの Miss Stephanie との会話の中で、Scout は将来なりたい職業について聞かれる。悩んだ末、最終的に出した答えは「女性」だったのである(308)。まだ身体は子供だが、彼女自身が「女性」を意識していること分かる。そのあと Mrs. Merriweather との会話で、Scout は彼女が興味を持ちそうな話題を考える(308)。会話は Scout が聞き手になり、Mrs. Merriweather の話が続く。Scout は会話の中で、丁寧な言葉で相づちを打ったり、聞きたいことがあると “Excuse me, Mrs. Merriweather,”(310)と言ってから質問したりしている姿も描かれている。それ以前に一度、Scout は女性たちの会に参加している。いとこの Lily に初めて出会うが Scout は “Who?”(176), “She our cousin? I didn’t know that.”(176)と非常にぶっきらぼうな態度で Lily に対して接していることが分かる。当時の様子と比較しても、以前のような「おてんば娘」Scout ではなく、「大人の女性」としての姿がここにある。この章の中で、Scout が女性たちの会に参加している途中、Atticus が帰宅し、Scout, Calpurnia, Aunt Alexandra, Miss Maudie の4人だけに Tom Robinson が死亡したことを伝える。この場面において、Scout は大人たちの会話には一度だけしか介入しない。しかし、Scout の視点から物語が書かれていることから、Scout が Tom の死に関して話す大人の姿を目撃し、Atticus を心配する Aunt Alexandra と Miss Maudie との会話(316)を目撃している。これらの内容を理解していることは Scout の “but I found myself shaking and couldn’t stop.”(317)という描写から分かる。Scout は、脱獄を図り17発もの銃弾で撃たれた Tom の死、Aunt Alexandra と Miss Maudie の Maycomb に住む人々に関する会話を理解して「震えている」と言える。Atticus を心配する Aunt Alexandra と Miss Maudie との会話の後 Scout は、Aunt Alexandra と Miss Maudie が何事もなかったかのように、女性たちのグループに戻る姿を目撃し、Scout 自身も再び参加する。

イニシエーションの観点から観ても、女性の会に参加することは Scout にとっての「経験との遭遇」であり、Miss Stephanie と Miss Merriweather との会話は Scout なりに「大人の世界」を知ろうとしたからである。いとこ Lily と Scout のやりとりの

比較からも分かるであろう。この章での、Tom Robinson の死と、Aunt Alexandra と Miss Maudie の会話も「経験との遭遇」と言えるだろう。Scout は 2 歳の頃に母を失っているが、寂しいと思ったこともない (7) と言っている。物心ついておらず、母の姿が記憶にないのである。ここでの Tom の死は、Scout にとって「人生において出会う最初の経験」であると言えよう。また、Aunt Alexandra が Atticus のことをここまで心配し、Maycomb の人々の話を内密にしている姿を目撃するのは「最初の経験」である。Scout 自身の「震え」が止まらなかったのは、Scout なりに出来事を「知ろう」とし「認識しよう」としたからと解釈できる。Aunt Alexandra はおそらく涙を流していた (317) が、彼女と Miss Maudie がグループに何事もなかったように戻ろうとする姿をみて、Scout も「どんなに苦しくても向かって行く」2 人の大人の女性の姿を学ぶ。実際に Scout は辛く複雑な気持ちを隠しながら「苦しくても」、まだ何も知らない他の大人の何気ない会話（「大人の世界の現実」）に再び参加し「直面」している。Aunt Alexandra は Scout の成長を認めており、Scout は「女性」としての意識をしているということがわかる (318)。最後には、彼女自身も自分が「女性」であることを意識している (318) ような一文がある。Scout 自身にも「女性」としての自己を強く意識していることが見て取れる。

この物語は、Jem に関しては語り手 Scout の目を通して成長が語られていることがはっきりと分かる。その一方で読者は、Scout は語り手として自らを語ることがないので、Jem ではなく自らのことは語らない語り手 Scout 自身の成長に気づいてあげなければならない。前述したように、Scout は「おてんば娘」から「女性」へと成長していることが分かる。

また Scout が成長している場面として、Scout が “Well, it’d be sort of like shootin’ a mockingbird, wouldn’t it?” (370) と述べている場面が挙げられる。Scout と Jem が夜 Bob に襲われ、Boo に助けられた時の出来事である。子供たちを襲った Bob は自分の持っていたナイフが刺さり、死亡した状態で発見される。町の保安官 Tate と父 Atticus がその原因について話をしていた。話は、倒れたときに Bob 自身にナイフが刺さってしまった事故死を主張する Tate と、Jem が殺害したのではないかと疑う Atticus がお互いの意見を述べあう形で続いていく。しかし Atticus が納得しないまま、Tate は事故死を主張して帰ってしまう。残された Atticus は Scout に “Mr. Ewell fell on his knife. Can you possibly understand?” と尋ね、Scout は “Yes sir, I understand,” (370), “Mr. Tate was right.” (370) と答える。Atticus が “What do you mean?” と聞くと、Scout は “Well, it’d be sort of like shootin’ a mockingbird, wouldn’t it?” と答えるのである。この一言に Scout の成長を読み取ることが出来る。しかし、ここに Scout の成長をみるためには、小説のタイトルにもなっている “mockingbird” が、この物語において何を意味しているかを考察していく必要がある。そこで、Chapter 3 では、Atticus と Miss Maudie が述べた “mockingbird”，物語における象徴としての

“mockingbird”, そして Scout の成長と Scout が述べた“mockingbird”の関係性について考察していきたい。

4. Mockingbird as a Symbol

Scout と兄 Jem はクリスマスプレゼントとして空気銃を Uncle Jack からもらう。その使い方について Atticus が説明する際 “but remember it’s a sin to kill a mockingbird.”(119)と子供に言っている。Miss Maudie の解釈は“Mockingbirds don’t do one thing but make music for us to enjoy. They don’t eat up people’s gardens, don’t nest in corncribs, they don’t do one thing but sing their hearts out for us. That’s why it’s a sin to kill a mockingbird.”(119)とある。中村真理は, “mockingbird”は他の鳥の鳴き声を真似て人間を楽しませるだけで、人間には何ら害を与えないという意味で、「罪がないもの」の象徴であると言っている。また, Murray は “Naïve in a different manner is the symbol of the mockingbird. Through its association with Boo Radly and Tom Robinson, the intended force of the symbol is to represent those who are unjustly marginalized, excluded, and imprisoned.”(87) と述べている。“mockingbird”が象徴するものが “innocence”, “harmlessness”であると解釈できる。

“Symbolism of the Mockingbird in ‘To Kill a Mockingbird’”の中で, Harper Lee は, Boo Radly, Tom Robinson, Mayella Ewell を“mockingbird”の象徴とした。一方, Murray は Boo Radly, Tom Robinson の 2 人を“mockingbird”と見なした。

Mayella はとても貧しい白人女性で, 社会から疎外され, 父親からの暴行で苦しんでいた人物である。物語の中の Atticus の証言から, Mayella が実際に Tom を誘惑しようとしてたという供述があり, 彼女が, “mockingbird”の象徴する “innocent”, “harmless”であるとは言いがたい。

Tom Robinson については, 裁判の中で Atticus が, Tom は“harmless”な人物であり, 事件に関して “innocent” であると供述している。また長い間 Tom を雇っていた人物の話から, Tom が普段から信頼に足る(261)人物であり, “mockingbird”の象徴する “innocent”, “harmless”であると言える。

Boo は外に出ることがなかったので, 子供達の興味を引くような噂や恐ろしい噂がたっていたが, 実際に彼が物語の中でとった行動は愛情に満ちたものだったのである。子供達のためにとった行動がいくつか物語にあるが, 子供達が Bob Ewell に襲われた時に助けたのも Boo だったのである。彼の行動から, 彼が“mockingbird”の象徴する “innocent”, “harmless”であると言える。

Chapter 2 の最後に Scout のセリフ(370)から彼女の成長を見ることができる。この時 Scout は Atticus や Miss Maudie が言う “mockingbird”を理解して言っていたのである。Scout は Atticus の意味する mockingbird を“innocent”, “harmless”の周りで起き

た出来事を通して学んでいた。Kasper は Atticus の教育について “To cultivate an understanding and acceptance of other people in his children, Atticus stressed that the important thing is to appreciate the good qualities and understand the bad qualities by treating people with sympathy and trying to see from their perspectives”(273)と述べている。Atticus の言う “it’s a sin to kill a mockingbird”(119)とは、ただ殺してはいけないというだけでない。Mockingbird は人に対して何の害もない存在である。死ぬことになる mockingbird がどんな気持ちかを考えて欲しかった。客観的な視点で、他の人の気持ちになって物事を見て欲しかったのだろう。Scout は実際に 2 人の “mockingbirds”(Tom Robinson と Boo Ridley)の身に起きた出来事を通して成長している。

Tom の裁判を通して、Scout は Tom がどんな人物かを見ているだけでなく、Mayella の人格、社会における立場を理解している。他人の立場に立ち見ることで、様々なことに気付き認識始めている。イニシエーションの観点から Tom の裁判を見てみると、この裁判は Scout が「大人の世界の現実を認識」する「経験との遭遇」であり、裁判を通して、Scout は Tom, Bob, Mayella を取り巻く社会の「現実」を理解するのである。

また子供達は Boo が表舞台に出てこない理由を理解しがついていた。これは Boo に関する噂に興味をもち、子供達はどのようにして社会的な力が Boo を創造したのかを知ろうとしたのである。その力を見て、自分たちの住む社会を理解し、Boo を孤立へと引きずり込んだ力と慣習を認識するのである。(Best, 551) Tom の裁判の後、Boo に対する子供達の見方も変化する。(304)

子供達が Bob の襲撃を受けた時、Boo が子供達を助けたのだが、Jem は深刻な怪我をしてしまったため、Scout が Boo と時間を共にして過ごすシーンがある。Scout が Boo を気遣い、積極的に声をかける場面が描かれており、それは偏見を持たずに他人のことを考えて振る舞う姿が描かれている。また Bob の襲撃を受けた時、ナイフが刺さって死んでしまうが、その死因ははっきりとしていない。倒れた時に刺さってしまったのか、Boo が刺したのか、最初に Scout を守ろうとした Jem が刺したのか…。その章の最後の部分でいうセリフが、先に述べた “Well, it’d be sort of like shootin’ a mockingbird, wouldn’t it?”(370)である。Scout にとって、助けてくれた Boo と助けようとした Jem を疑うことは “innocent” で “harmless” な存在を殺してしまうことを意味していたといえる。そのセリフを受けて Atticus が Scout の髪を撫でて愛情を表現するところから、Scout が Atticus に向けて mockingbird を実際に使うことで、「大人の世界の現実」に立ち向かい、Atticus や Miss Maudie のいう mockingbird の意味を「認識」したと解釈できる。

最後に Scout は Boo を家へと送る際、Boo の家から自分の町を眺める。同じ町だが、違って見える。Scout が今まで見たこともない景色が広がっている。Boo の視点

からいつも Scout の周りに起きていた沢山の出来事が思い出される。ついに Atticus の教育を理解するのである。(374)

村山 和子は “it’s a sin to kill a mockingbird.”(119)という Atticus のセリフを愛と正義の表現であり、著者の倫理観を表現していると述べている。(140) “Mockingbird”は単に Tom や Boo のような “innocent”で “harmless”な存在を意味しているだけでなく、愛と正義を意味しているかもしれない。著者である Harper Lee はこの本をラブストーリーだとみなしている。この物語は、Atticus とその子供達の愛の物語である。この本の中で、子供達に向けた Atticus のメッセージは単に無実のもの、害のないものを殺してはいけないということではなく、他者の視点に立って物事を見るということである。

5. Conclusion

これまで、1960 年に出版されたにもかかわらず、物語が 1930 年代に設定された理由について考察し、Scout の成長物語として議論し、“Mockingbird”の意味を考えてきた。Harper Lee は小説の中で大きなテーマの一つとして、Tom Robinson と Boo Radley の身に起きた差別を扱った。1950 年代、60 年代に出版したが、1930 年代に物語を設定した。小説に対する南部の人々からの批判を避けようとしただけでなく、1930 年代に実際に起きた出来事を関連づけようとしたのである。当時社会に強く影響を及ぼしたこの作品を出版したのは非常に勇気あることである。

さらに、Scout は作品の中では、6-8 才の女の子だが、「おてんば娘」から「大人の女性」へと成長する。この小説を成長物語として読むこともできる。Scout は語り手なので、自身の成長を語ることはないが、身の周りに起きた出来事と関わり、それを通して「大人の女性」へと成長する。“Mockingbird”の意味、成長物語としての *To Kill a Mockingbird* を考えることを通して、Scout の成長と Mockingbird との関係性をみることができ、そして “Mockingbird”には Atticus が子供達にこういう大人になってほしいと願う愛情がある。

Harper Lee 自身、この作品をラブストーリーだと考えていると、小説の背表紙に書かれている。物語の中で “Mockingbird”が 4 回しか使われてないにもかかわらず、タイトルとして使われているのは、不思議なことであると言われている。調べていくと “Mockingbird”が無実な存在の象徴であると言える。その無実な存在とはこの小説の中では、犯していない性的暴行で訴えられた Tom Robison と実際には子供達思いの人物だが悪い噂ばかりが一人歩きしている Boo Radley の 2 人である。Atticus が Scout に分かってほしかったのは、一方的に無実のものを非難することが罪であるということ。また他者の立場に立って物事を見るということである。2 人の “Mockingbird”と周りの環境が Scout に Atticus の教訓を気づかせたのである。Harper

Lee の意味するラブストーリーとは、Atticus とその娘 Scout との愛である。Scout は様々な出来事を通して女性として成長し、Atticus は愛と正義に満ちたメッセージを “to kill a mockingbird” にという子供達に向けたセリフに込めたのである。最後に Scout は彼の愛と正義に気づくのである。

注

*本論文は、同題目 2013 年度卒業論文の要約版である。

Works Cited

- Best, Rebecca H. “Panopticism and the Use of ‘the Other’ in To Kill a Mockingbird.” Mississippi. Quarterly (Summer/Fall 2009, Vol.62 Issue 3/4): 541-552.
- Evans, Robert C. “Unlikely Duos: paired Characters in To Kill a Mockingbird.” Harper Lee’s To Kill a Mockingbird. Ed. Michael J. Meyer. Scarecrow, 2010. 101-112.
- Hassan, Ihab. Radical Innocence: Studies in the Contemporary American Novel. : Princeton U P, 1961.
- Johnson, Claudia Durst. Understanding To Kill a Mockingbird. Greenwood, 1994. Kasper, Annie. “General Semantics in To Kill a Mockingbird.” ECT (Jul 2006, Vol.3 Issue3) : 272-274.
- Kelley, James B. “What Teachers (Don’t) Say: A Grounded Theory Approach to. Online Discussion of To Kill a Mockingbird.” Harper Lee’s To Kill a Mockingbird. Ed. Michael J. Meyer. Scarecrow , 2010. 3-18.
- Lee, Harper. To Kill A Mockingbird. Grand Central, 1960.
- Murray, Jennifer. “More Than One Way to (Mis) Read a Mockingbird.” Southern. Literary Journal (Fall 2010, Vol.43 Issue 1): 75-91.
- “Symbolism of the Mockingbird in ‘To Kill a Mockingbird’ by Harper Lee.” Essay. Forum. <http://www.essayforum.com/literature-review-5/symbolism-mockingbird-kill-mockingbird-harper-lee-50427/> 18 Dec 2013.
- 中村真理 『『アラバマ物語』とディープ・サウス』『相模英米文学』第 26 号 (2008 年):1-8.
- 平野 晋 『『アラバマ物語』の研究』 http://www.fps.chuo-u.ac.jp/~cyberian/To_Kill_A_Mockingbird.html 30 Jan 2014.
- 村山和子 「Harper Lee の “To Kill a Mockingbird” と純文学性についての考察」 『英文学研究』 (1968 年): 127-144.